

江戸名所花暦 × 駒込図書館

吉原の地に生まれ、吉原を盛り上げようと数々の出版物を世に送り出し、江戸の人々の絶大な人気を集めた蔦屋重三郎の生涯が話題となっています。今号は『江戸名所花暦』より、その吉原の桜についてご案内いたします。



- 資料名 えどめいしよはなごよみ 江戸名所花暦
- 著者 おかさんちよう 岡三鳥 はせがわ 画 長谷川 せつたん 雪旦
- 刊行年 文政10(1827)年
- 四部三冊

江戸・吉原 仲の町通りの桜

新吉原 おい 山谷にあり。毎年三月朔日より、大門のうちの町通り、
すせんぼん 左右を除て中通りへ桜数千本を植る。常には、これ往来の地なり。

江戸名所花暦 巻之一(春之部)より

吉原は徳川幕府公認の遊郭として、元和3(1617)年に誕生したと伝えられています。場所は現在の日本橋人形町の辺りでした。その後次第に江戸の人口も増加し、吉原が江戸の中心地となったため、明暦3(1655)年に現在の浅草界限へ移り、新吉原となりました。

吉原の大門をくぐると仲の町通りに入り、普段は何もない通りに花見の季節には植木屋の手によってたくさんの桜の木が植えられ、その距離は約200mにもおよびました。この時期には江戸の老若男女がこぞって吉原を訪れ、葉桜の頃になっても賑わい、江戸で随一の花見の観光地となっていたようです。驚くことに花が終わると桜の木は全て取り除かれ、その後も季節に合わせてアヤメや菊などが植えられ、四季折々の様々な演出に膨大な資金を投じていました。樹木を傷めずに大規模な植え替えを行うことができた江戸の植木屋の園芸技術の高さがうかがえます。吉原の桜は三河島の植木屋が植えていたと伝えられ、駒込染井の植木屋伊兵衛も吉原に桜を供給していたのではないかとわれています。

当時の物資輸送には、道幅の広い本郷通りを利用していました。吉原へ運ぶたくさんの桜は、江戸とその周辺の多くの植木屋から集められたことでしょう。染井の植木屋もこの本郷通りを通して運搬していたのではないかと考えられます。

関連図書の紹介①

『図説江戸吉原の本-遊里を知れば、江戸が見えてくる！- (洋泉社 MOOK)』

洋泉社 2012年刊【384.9ス】

今年(令和7年)のNHK大河ドラマ「べらぼう」の舞台になっている吉原。

その成り立ちや歴史については、知っているようで知らないことばかりです。江戸時代から戦後までの340年の歴史を振り返ります。

女性の髪形や、化粧など、花魁たちの流行が、庶民に影響を及ぼすなど、風俗の発信源にもなりました。「粋」に生きた吉原の人々から、江戸の様子が見える本です。

関連図書の紹介②

『花競べ-向嶋なずな屋繁盛記-』

朝井まかて・著 講談社 2011年刊【B7】

江戸・向嶋で種苗屋「なずな屋」を営む主人公は、駒込染井の霧島屋で花師の修行をしました。霧島屋から一子相伝の桜を譲り受け、その謎を解くために、あちらこちらの桜の木を巡っています。吉原の夜桜に植えるための桜木の依頼が「なずな屋」にきました。「あとは野となれ山となれ」、門外不出の桜木は、吉原に植えられたのでしょうか。フィクションではありますが、当時の吉原、植木屋の様子を伺い知ることができます。

■□■吉原・浮世絵・蔦屋重三郎■□■

・『吉原の江戸川柳はおもしろい』
小栗清吾・著 平凡社 2018年刊 911.4オ(巣鴨図書館所蔵)

・『稀代の本屋 蔦屋重三郎』
増田晶文・著 草思社 2016年刊 マス

・『もっと知りたい歌川広重-生涯と作品-改訂版 (アート・ビギナーズ・コレクション)』
内藤正人・著 東京美術 2024年刊 721ウ

・『落花狼藉』
朝井まかて・著 双葉文庫 2022年刊 B7 (千早図書館所蔵)